

以下の文章中には、ねつ造された石器またはそれに基づく論考や記述をしている部分があります。取り扱いには十分ご注意ください。

上高森遺跡第4次調査

上高森遺跡は、1992年8月東北旧石器文化研究所によって発見され、同研究所が東北福祉大学考古学研究会の協力を得て、翌1993年10月第1次調査、1994年10月に第2次調査、1995年10月に第3次調査を実施した。その結果、A地点では約40万年前のTm-14直上とTm-14直下からハンド・アックス類似の両面加工のヘラ形石器、クリーヴァーなど48点、そしてB地点では50万年前のTm-1の10cm下位の9層上面から小型石器7点、さらに50cm下位のKs-1の下16層上面では、3カ所の石器埋納遺構が検出された。特に15点の石器が出土した石器埋納遺構2はその配列を巡って原人達の能力を見直すきっかけとなった。また、今回発見されたものも含めて上下・左右対称を意図したような配列となっている。この他に16層上面では面加工石器、クリーヴァー、三稜尖頭器など11点が発見された。そして従来基盤と考えられていた18層上面から両面加工石器、スクレイパーなど22点が出土している。

第4次調査は1998年10月に実施された。今回はB地点の1995年に調査した発掘区を拡張して行われた。その結果、1995年最下層（18層）の下に位置するオレンジ色の19層の上面から14点の石器が発見された。これはこれまで日本最古であった本遺跡の18層上面をさらに更新し、日本最古となった。そして、この石器群に属する玉髓製の石核に剥片6点が接合し、宮城県の旧石器時代前・中期としては初めて遺跡内での石器製作を確認することができた。他に小型の尖頭器2点、くさび形石器1点、錐1点、剥片3点が発見された。

また、1994、95年度と同様、16層上面で、直径20cmの円形の穴にヘラ形石器5点が並べられた石器埋納遺構4が発見された。他に石器埋納遺構の近くからの同じ層からヘラ形石器4点、クリーヴァー1点、剥片2点がまとめて発見された。さらに、Tm-1（高森第1テフラ）下の9層上面から鋸歯縁石器、くさび形石器、剥片各1点、12層上面から剥片1点が発見されている。

今回発見された石器埋納遺構4は直径20cmのほぼ円形の穴にやや大型のヘラ形石器を中心に小型の黒色頁岩製のヘラ形石器と灰色の頁岩製ヘラ形石器が上下2点ずつ左右対称に並べてあった。（東北旧石器文化研究所）



山王罎遺跡

山王罎遺跡は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての集落遺跡である。1964年および1965年の発掘調査で大規模な低湿地遺跡であることが明らかとなった。

その後に行われた調査では、縄文時代・弥生時代の集落構造、それをとりまく自然環境を明らかにするために、遺跡の微高地を対象としてきた。縄文時代の住居跡や土壇群、弥生時代前期の竪穴住居跡、集落を区画する溝跡、合せ口土器棺など数多くの遺構が検出された。

平成10年度の調査では泥炭層の保存状況を確認し、遺跡の環境復元に必要なデータと考古学的資料をうる目的で、低湿地包含層を調査した。

調査地点に堆積する有機質土層は植物質遺物を豊富に包含している。その形成時期は縄文時代晩期Ⅳ期からⅤ期にかけてであり、低湿地部は弥生時代前期までには埋没している。今回の調査では弥生時代前期の遺構および遺物包含層、縄文時代晩期の遺物包含層の精査が行われた。

遺構では弥生時代前期の竪穴住居跡1棟を検出した。土壇等によって一部は失われていたが、直径約4mの地床炉をもつ竪穴住居である。炉跡から弥生1期の壺が出土しており、この竪穴住居の時期を示すものと考えられる。

縄文時代晩期の遺物包含層については晩期Ⅴ期の層を精査した。炭化した堅果類、動物遺存体などが多数出土したほか、渦巻文短頸壺にともなうとみられる蓋が出土している。また、環境復元を目的とした自然科学分析のため、晩期Ⅳ期の有機質土層から試料を採取した。

以上今回の調査を含め、これまでの4回の調査によって、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての環境の変遷やそれにとまなう居住域の変化など当時の集落構造が明らかになりつつある。

(一迫町教育委員会 大場亜弥)



泥炭層堆積状況

市川橋遺跡

(宮城県調査分)

宮城県文化財保護課では、都市計画道路(玉川・岩切線) 建設工事に伴う市川橋遺跡の調査を、1996年から1998年までの3年にわたっておこなってきた。調査最終年次にあたる今年度の調査区は、多賀城外郭南門跡の南西約200mに位置し、初年度の確認調査の際、対象地全域が古代の河川跡であることが確認された場所である。

今年度の本調査では、この河川跡が古墳時代から平安時代にかけてのもので、南東から南西方向へと緩やかな弧を描くように流れていたことが確認された。また、河道全体の規模は、上幅が約20m、深さ約3～4mで、時代がさがるにつれ南側から北側へと流路が下がるにつれ南側から北側へと流路が変移したこともわかった。

出土遺物量は整理箱で約700箱にものぼり、その大半は水漬けの状態であったため、保存状態の良いものが多い。こうした保存状態の良さが、今回の河川跡出土遺物の大きな特徴といえる。中でも特筆すべき遺物として、まず、6世紀末～7世紀のS D5093河川跡から出土した、丸木舟をはじめとする多量の木製品があげられる。さらに、8世紀～9世紀前半のS D5021河川跡から出土した木簡、多量の墨書土器などの豊富な文字資料も注目される遺物である。とくに「杜家立成」木簡は世界的にも貴重な資料である。

(宮城県文化財保護課 古川一明)



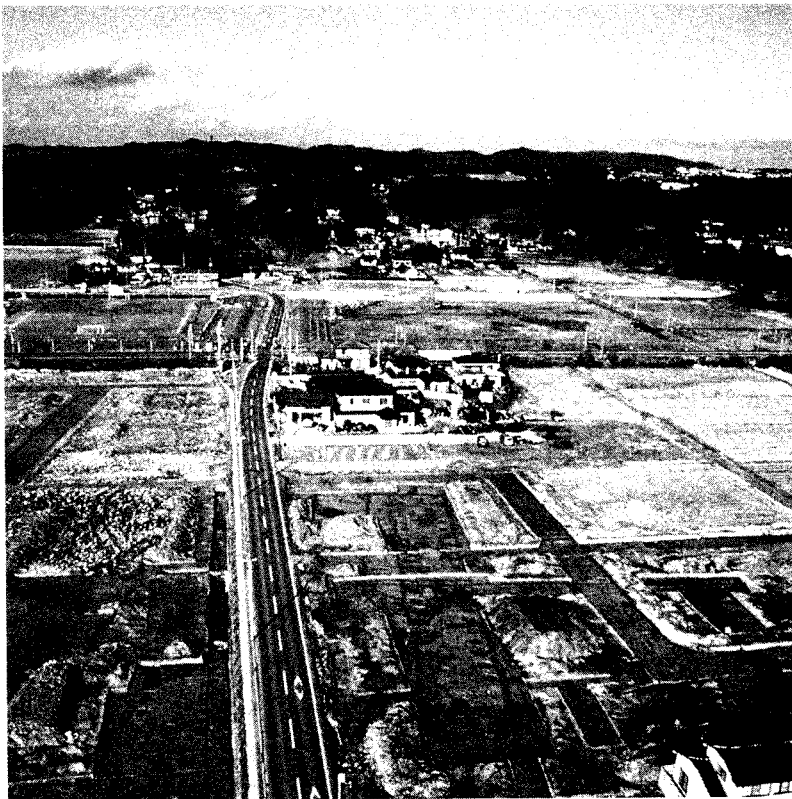
「杜家立成」木簡 S=1/2.25

市川橋遺跡

(多賀城市調査分)

本遺跡は特別史跡多賀城跡の南面および西面に広がる大規模な古代の遺跡である。平成10年度は、昨年度から継続している多賀城跡南面の広い範囲を対象とした確認調査（第24次）と、区画整理事業に係る事前調査（第25次）を実施し、多賀城南面の様子を考える上で多くの成果をあげることができた。特に、第24次調査では、南北大路と東西大路の交差点より北東の地区において、城外最大級の南北棟建物3棟を発見した。全体を検出したものは桁行11間（33m）で、それぞれ雨落溝が巡っている。これらは、南北に2棟ずつ2列に整然と建ち並んでいたと推定され、城外に置かれた重要な官衙の一部と考えられる。年代は8世紀末から9世紀中葉である。この地区は東側に低湿地が広がるなど地形的制約があり、1町四方の方格地割りが施行された南北大路の西側地区とは様相が異なっていることが明らかになった。また、遺物は天長6年（829）銘木簡や海獣葡萄鏡など興味深いものが多数出土している。

(多賀城市埋蔵文化財調査センター 千葉孝弥)



海蔵庵板碑群

本遺跡は河北町尾崎の海蔵庵の裏山にあり、長面浦に臨む標高17～25mの南急斜面に立地している。尾崎浜は、近世期には現在の雄勝町に含まれていた。

板碑は地山を削り出した平坦面に原位置を留めて立っている。鎌倉時代後半(弘安10年・1287)から室町時代前半(文安4年・1447)までの100基以上の板碑が出土しており、金箔の残っている板碑も多数見られる。

斜面下中央の第1段(鎌倉時代)→斜面上方の第2段西側(鎌倉時代末)→第2段東側(南北朝時代)→西側上方の第4段(室町時代)へと段の造営が移り変わっていったと思われる。その他数基ずつの点在した板碑が第2段の西側にある(第3段)。

第1段には、安永風土記に「よりとも」様と伝えられる最古の弘安10年の大型板碑がある。天井石と側面石で囲まれ、両側に「キャカラバア」が三行刻まれる板碑が並列する。左側の「キャカラバア」の前面から伝世していたと思われる水辺秋草双雀鏡(平安時代)が出土している。第2段西側は、「よりとも」様と同様に中心となる板碑を石囲いし、「バ南无大日如来」を三行刻んだ板碑を両側に並列するものが三群あり、倒壊もしくは移動されている。第2段東側は、石囲いを伴う忌日ごとに追善供養された複数基の板碑群が5群ある。三つの群からは、火葬骨が出土している。第4段は、忌日ごとに追善供養された板碑群で移動されており、当時の在り方は不明である。

本板碑群は中世の風景をそのまま残しており、中世板碑研究に大きな影響を与えるものである。

(宮城県文化財保護課 茂木好光)



石囲いのある伝「よりとも」様の板碑

仙台城本丸跡

仙台城本丸跡の発掘調査は、石垣修復工事に伴うもので、仙台市教育委員会文化財課が担当し、1997年7月から着手し、調査面積は解体石垣が約3,400m²(延長190m、高さ3~20m、石材数約9,000石)、付帯工事も合わせた平場部分が約4,000m²である。

玄武岩質安山岩の切石からなる「切り込みハギ」の石垣は、三次元測量図とCADを用いて復元図を作成し、伝統的な工法を用いて修復する予定である。

石垣背面からは「旧石垣」の石材を利用した長さ120m、高さ3~8段の「階段状石列」、排水用の玉石層、作業通路、さらに築城期の「野面積み」石垣や、地震により旧盛土の「スベリ面」を発見している。石材の調査では、刻印47種695点、刻字、大小の「矢穴」、穴を穿ち「蓋石」をした築石、朱墨書きの石材、鉄のクサビやカスガイも検出している。

本丸平場では、「礎板石」や根石をもつ建物跡、材木列(塀)、溝跡、「石敷遺構」、植栽痕などを発見している。整地層下部からは、旧表土に覆われた通路や「空堀」など、国分氏の居城であった「千代城」の可能性が高い遺構や、「火葬遺構」も検出している。

出土した瓦は50トンを越しており、6,000点以上の瓦を抽出し、金箔瓦には菊丸瓦と軒平瓦など4点がある。鯨瓦は復元長が1m近い大きさで、菊や桐を模した鬼瓦など、漆が付着し、金箔瓦の可能性が高い。花菱文軒平瓦には「滴水瓦」も3点含まれ、二ノ丸や瑞巖寺、利府町大沢窯跡出土瓦に類似している。陶磁器は、明末清初の中国産染付(青花)の占める割合が極めて高い。17世紀の初頭のヴェネチアやボヘミアなどの製品とみられるガラス器の破片492

点も出土しており、極めて稀少である。漆器には梨地蒔絵が数点含まれ、536点の水晶も出土している。

(仙台市教育委員会 金森安孝)



解体中の現理垣と背面の「階段状石列」